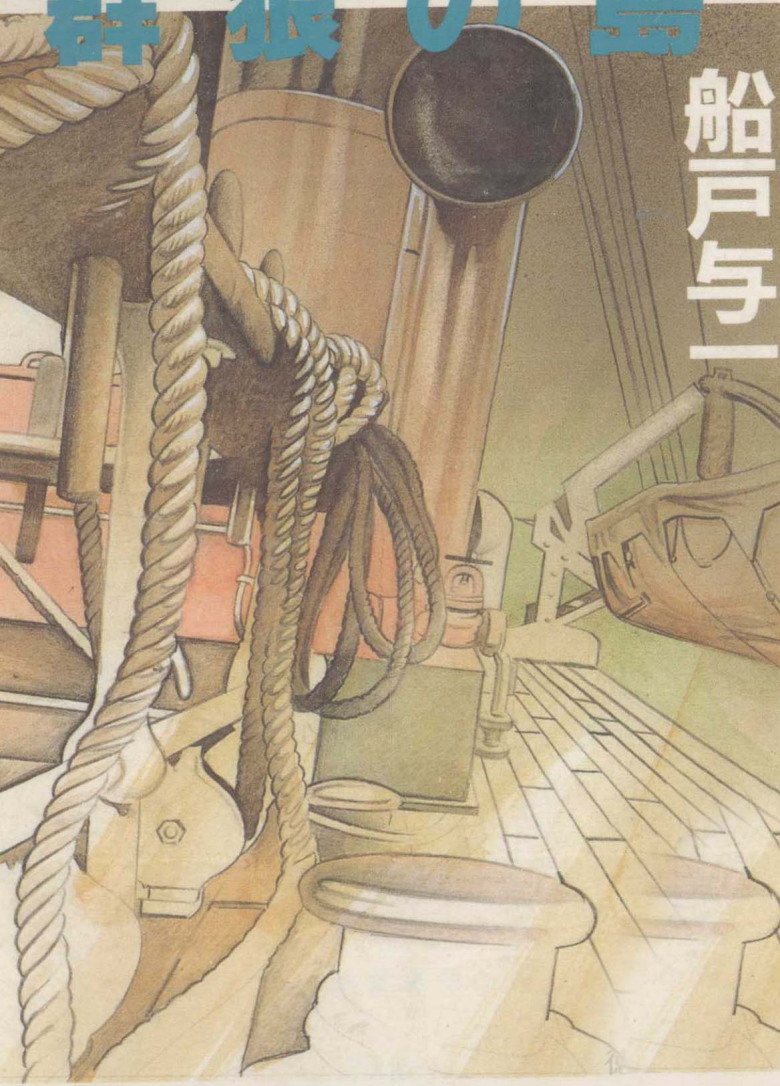
群狼の島

船戸与一



徳間文庫

群狼の島

© Yoichi Funado 1992

ふ-3-5

1992年4月15日 初刷

著者 船戸与一

発行者 荒井修

東京都港区新橋四—一〇 〒一〇五

発行所 株式会社徳間書店

電話(〇三)三四三三・六二三一(大代)

振替 東京四—四四三九二番

印刷 凸版印刷株式会社

製本

〈編集担当 山下寿文〉

ISBN4-19-599496-9 (乱丁、落丁本はお取りかえいたします)

江苏工业学院图书馆
藏書の章

戸与一

聽聞書店

目次

プロローグ　マダガスカル沖　5
第一章　トアマシナの疾風　22
第二章　シーラカンスの島　122
第三章　アンツェラナナの雷鳴　238
エピローグ　アンタナナリヴォの闇　340
解説　井家上　隆幸　371

此为试读，需要完整PDF请访问：www.erton

マダガスカル民主共和国概要

面積　五八七・〇四一平方キロ
人口　九一一・二万人（七六年推定）
首都　アンタナナリヴォ（人口三八・二万）
独立　一九六〇年六月二六日
元首　ラチラカ大統領（海軍中佐一九三六年生まれ）
政党　革命防衛国民戦線（ＦＮＤＲ）
公用語　マダガスカル語　フランス語
宗教　約四五パーセントがカトリックを主とするキリスト教で、五パーセントがイスラム教、他は伝統的信仰
通貨　マダガスカル・フラン（二四八・五ＦＮＧ＝１$）
主産　コーヒー、クローブ、バニラ、食肉、クロム、大理石
ＧＮＰ　一八・七億ドル（七六年）、一人あたりＧＮＰ二〇〇$

財団法人アフリカ協会「アフリカ年鑑」より

プロローグ　マダガスカル沖（一九七五年二月九日夜）

夜は黒く、海も黒かった。第七福寿丸はやわらかにのたうつインド洋の波の瀬をかきわけてまっすぐ南へ進んでいた。鷲沢剛介は船尾楼（アフター・ブリッジ）の手摺り（オープン・レール）に身をもたせかけて最後の一服を喫い終えた。おれは腕組みをしたまま、スクリューに浮きあがる白い泡が航海灯の淡い光に照らされながら黒い海面に消え流されていくのを見ていた。

「恩に着るよ」鷲沢剛介の低い呟（つぶや）きとともに甲板に投げ棄てた吸い殻を踵（かかと）で踏みにじる音がした。「あんたも達者（うなず）でな」

おれは暗がりのなかで頷いた。

吐息が動いた。

気配が手摺（てすり）りを乗り越えた。

水音が鋭く響いた。

おれは鷲沢剛介の体が海面に浮かびあがるのを確かめもせず、船尾楼を離れ、居住区に向かって歩きはじめた。《二等航海士》と書かれたドアを開けて狭い寝台に体を伸ばし、それから枕もとのウィスキーを舐めて眠りについた。

どれくらい眠ったのかわからなかったが、寝返りをうったそのときに、おれはふいに何かが乱打されはじめるのを聴いた。夢うつつのなかではそいつはアフリカのタムタムの響きのように聴こえた。眼を覚ますと、船室のドアが激しく叩かれていた。

「おい、起きな！」甲板長のだみ声がノックの声につづいた。

「どうしたんです？」

「鷲沢がいねえ、船長室にきてくれ」

上着をはおりながら腕時計に眼をやると、マダガスカル時間で午前四時をわずかに過ぎていたところだった。おれは瞼を擦りながら船橋のほうへ歩いていき、船長室のドアを開けた。なかに船長をはじめとする六人の上級船員が甲板員の佐野春夫を取りかこむようにして座っていた。

「何があったんです？」おれはわざと眠そうな声を出して足を踏みいれた。

「鷲沢が逃げたんだ」甲板長の岩本繁次が分厚い手で不精髭を触わりながら不機嫌そうに答えた。「どこを探しても、やつの姿は見えねえ」

「事故じゃないんですかね？」
「そうじゃねえ、救命具がひとつ消えてる。やつは例の無電に気づいて海のなかに飛びこんだんだ。ここからマダガスカルの沿岸まではたいした距離じゃないからな」
「だれがあの無電をやつに教えたんです？」
「そいつを知ろうと思ってな、おまえを呼んだんだ。あの無電のことはおれたち上級船員しか知りやしない。まさか、おまえ、あの無電のことをやつに喋りはしなかっただろうな？」
おれは黙って首を振った。
岩本繁次は頷きながら視線を佐野春夫に向けた。五十四歳のずんぐりとしたこの甲板長は船長室の中央に身を縮めて腰かけている三十まえの甲板員をいたぶるような眼つきでゆっくりと睨めまわした。
「ぼくじゃありませんよ！」か細い声が顫えながら佐野春夫の唇を押しあけた。「さっきも言ったでしょう、ぼくはそんな無電がはいったことも知らなかったんですからね」
「そんなことはわかってるよ」船長の北井修が言った。「おまえをここに呼んだのは、なぜ静岡県警の公安部からこんな無電がはいってきたかを説明してもらうためだよ。いいかい、もう一度電文を読みあげようか、こうだよ。《貴船に上船中の司厨助手・鷲沢剛介をマダガスカル、タマタヴ港にて待機中の日本人公安関係者に引き渡されたし》」
「知りませんよ」

「知らねえことはねえだろうが！」突然、甲板長が大声をだした。「やつをおれたちに紹介して司厨助手としてこの船に乗せたのはおまえなんだからな！」

佐野春夫は眼を伏せて黙りこんだ。

「甲板長、そんなに怒鳴ったってしょうがないだろう？」通信長の赤尾征二がとりなすように呟いて佐野春夫の顔をじっと覗きこんだ。「おまえにはあの鷲沢剛介がどんな男かを説明してもらうだけでいいんだよ。なにしろ、おれは十三年もこの船に乗ってるが、あんな無電を受けたのははじめてなんだからな。いったい、あいつは上船するまで何をしていたんだ？」

佐野春夫はそれでも黙っていた。

「どうした？」船長が低い声で促した。「あの男は何かの犯罪に関係してたのか？」

返事は戻ってこなかった。

「もったいぶって黙ってるつもりなら、タマタヴ港でこの船を降りてもらうことになるがね」船長は煙草に火を点けながら事務的な口調でそう言った。

佐野春夫の細い眼がようやく上眼づかいにそっちを見た。

「船長」声は掠れていた。「これから喋ることをここだけの話に収めてくれますか？」

船長の北井修はしゃくれた顎を右手でゆっくりと撫でまわした。それから、左手の指のあいだに挟んだ煙草をぎこちなく喫いこみ、黙って頷いた。

「鷲沢さんはぼくの大学の先輩だった。ぼくはあの人の影響であるセクトにはいった」

「過激派のかね？」
「ええ」
「どこのセクトだ？」
「そいつは勘弁してくださいよ」細い眼がまた床のうえに落ちた。「セクトの名まえは言いたくないんですよ、そいつを忘れるためにぼくはこの船に乗ったんですからね」
「セクトって何だね」甲板長の岩本繁次がいらだった声をだした。
「党派ですよ」
「過激派の集団さ」通信長の赤尾征二がそばから口を添えた。
「過激派集団って、あの内ゲバばっかりやってる連中のことかい？」
佐野春夫の薄い唇からふっと萎えた笑いが洩れ零れた。
「おい」甲板長の肉太の手がやにわにその肩を掴んだ。「おめえ、そんなとこにはいってて、まさか火つけなんかやっちゃあいねえだろうな？　船にはむかしからはっきりしたしきたりがある。殺しや強姦ならかまわねえが、盗みと火つけだけは船には乗せねえことになってるんだ。えっ。どうなんだ？　もしおまえにそういう前科があるようだと……」
「甲板長」
だが、船長のその声は甲板長には聞こえないようだった。
「なあ、どうなんだ？　正直に言ってみな。おめえ、まさか火焔瓶かなにかで交番に火をつけ

此为试读，需要完整PDF请访问：www.erton

たりしちゃあいねえだろうな？」

「甲板長」船長がもう一度たしなめた。

甲板長の岩本繁次ははっとなって十歳ほど年齢下の船長の顔色を窺った。船長はそれを無視して、話をつづけろというふうに佐野春夫に向かって顎をしゃくった。

「鷲沢さんはぼくが属した組織のなかでもごりごりの活動家だった。わかりますか、あの人は軍事を担当していたんですよ。いわば武装闘争の専門家でした」

「あいつがか？」通信長の赤尾征二が頓狂な声をあげた。「あのおとなしそうな顔をした鷲沢剛介が？」

「見かけはああだけど、軍事の知識はたいへんなものだった。それに空手や剣道の腕のほうもね。ちょっとでも運動に関係した連中なら、あの人の名まえを知らない人間はいませんでしたよ」

「公安が追ってるのは、鷲沢剛介がごりごりの活動家だという理由でか？」船長が煙草の火を灰皿のなかで揉み消しながら訊いた。

佐野春夫はしばらく返事をしなかった。視線がせわしなく床を這い、唇の端が言おうか言うまいかとびくびく顫えた。

「どうなんだ？」甲板長がいらだった声で促した。「言ってみなよ、えっ？」

「あの人は人を殺してる」

「こ、殺しかよ？」甲板長の大きな体がぶるっと顫えた。「やつは殺しをやったのかよ？」

佐野春夫は力なく頷いた。

「だれを殺したんだ？」船長が訊いた。

「内ゲバの時代ですからね、鷲沢さんは対立セクトの人間をひとり殺してるんです。銃器類を車で運ぶ途中、対立セクトの連中に鉄パイプで襲撃され、やむなくそのうちのひとりを拳銃で射殺したというわけですよ。それ以降、あの人はその対立セクトの暗殺リストの最優先目標にあげられている」

「警察と対立セクトの両方から追われているというわけか」船長はひとりで頷きながら、二本目の煙草に火を点けた。「それで切羽詰まって後輩のおまえを頼り、この船に乗りこんで日本を脱出しようとしたわけだな？」

「それだけなら、あの人は船なんかに乗りやしませんよ」

「どういう意味だ？」

「追ってるのが警察や対立セクトだけなら、鷲沢さんはいとも簡単に地下に潜伏して活動をつづけたでしょうよ」佐野春夫はじぶんに言いきかせるようにつづけた。「だがね、あの人は仲間うちからも追われはじめたんです。ぼくは二年まえに活動から脱けてこの船に乗ったから詳しいことはわかりませんが、鷲沢さんは半年ほどまえに今後の軍事方針をめぐって最高幹部会と決定的に対立した。それで、分派工作の疑いをかけられて組織を追われ、ついに日本を脱出

せざるをえなくなったというわけです」

「おまえは」船長の北井修は吐きだした紫煙を見つめながら言った。冷えた声だった。「そういう事情を知りながら、あの男をわたしに紹介し、司厨助手としてこの船に傭(やと)わせたのか？」

佐野春夫は何も言わなかった。

「おまえは鷲沢剛介が殺人者だと知ってて、このわたしに船員手帳の交付手続をさせたのか？」

佐野春夫はうつむいたままだった。

船長室のなかではねばねばした吐息がとぐろを巻きはじめた。おれは両手をポケットに突っこんだまま事の成り行きを見つめていた。

「仕方がなかったんですよ！」突然、佐野春夫が叫び声をあげた。「鷲沢さんにはまえに何度も助けられてるし、断わりきれるもんじゃないんだ！　それにこの船にまで公安の無電がはいってくるなんて思ってもいなかったんですよ、そうでしょう？」

だれも返事をしなかった。

いくつもの視線だけがこの若い甲板員の顔にへばりついていた。

「ぼくをどうするつもりです？」佐野春夫の声がますますひきつった。「そりゃあ、鷲沢さんの経歴を隠して紹介したのはまずかったかも知れない。だけど、船に乗るのにむかしのことを洗いざらい喋る必要はなにもないでしょう？　それに、甲板長(ボースン)が言ったとおり、鷲沢さんだっ

てぼくだって火つけや盗みをやったわけじゃない、船乗りになる資格はあったはずですよ」
「わかるもんか！」甲板長が忌々しそうに吐き棄てた。「おまえら、日本をぶっ壊すためなら何でもやるんだろう？　火つけや盗みをやらなかったって証拠がどこにある？」
佐野春夫がびくっと甲板長の岩本繁次の顔を見た。そして、その視線がしだいにうろたえながら船長の北井修のほうに向かって滑っていった。
「船長！」甲板長のだみ声がますます荒くなった。「こいつをタマタヴ港で降ろしちまいましょうや。甲板員の補充はいくらもききまさあね。タマタヴじゃあ他の船を降ろされた連中がごろごろしてますからね。ほかのことならともかく、日本をぶっ壊そうとして人まで殺した男の仲間をこの船に乗せておくわけにはいかねえ、こいつらおとなしそうな顔をしてても肚のなかじゃあ何を考えてるか知れやしねえんだから」
船長は何も言わなかった。黙って煙草をふかしつづけた。紫煙が狭い船長室のなかで身をくねらせ、煙草を喫わない通信長の赤尾征二がときどきむせこんだ。
「船長」おれは両手をポケットからだして腕を組んだ。「まさか、その男をタマタヴ港で下船させるつもりじゃないでしょうね？」
船長の眼がこっちを向いた。みんなの眼もこっちを向いた。
「経歴を隠して人を紹介したことぐらいで船を降りなきゃならないのなら、こんなマグロの冷凍運搬船に乗る人間なんかいなくなっちまいますよ。たしかに、こんな船にあんな無電がはい

ってくるなんて前代未聞だ。でも、その男はあの無電がはいったことさえ知らなかったんでしょう？　鷲沢剛介が逃らかったのはその男のせいじゃない。タマタヴ港で下船させる理由なんてどこにもないじゃないですか？」

だれからも言葉は返ってこなかった。

おれは救われたような眼でこっちを見ている佐野春夫の表情を眺めながらつづけた。

「ひとりの理由ありげな男がいつのまにか船から消えた、それだけのことでしょう？　いったい何を大騒ぎしなきゃならんのです？」

「タマタヴ港で待機している公安関係者には何と説明する？」通信長の赤尾征二がだれにとはなく小声で訊いた。

「ありのままを言えばいいでしょう？　公安警察にいったいどんな遠慮があるんです？」

声がまた途絶えた。

おれは船長室のドアを開いた。

だれもが食いいるようにこっちを見ていた。

「もし、その男をタマタヴ港で下船させるようなら」おれは敷居をまたいでゆっくりと振りかえった。「おれにも考えがありますよ」

「考えって何だ？」甲板長が言った。

「おれがあんたがたに博奕でどれだけの貸しがあるか御存知でしょう？　そいつを待ったなし

で取りたてますよ」

息を呑む気配が船長室のなかの空気をかすかに顫わせた。おれは戸口を離れ、船橋から居住区に向かう狭っくるしい通路を歩きはじめた。

船の横揺れがわずかに大きくなっていた。

おれはじぶんの部屋に戻り、寝台の枕もとに置いてあるウィスキーの瓶を手にして甲板に向かった。さっき鷲沢剛介が海に飛びこんだ船尾楼のそばで腰をおろし、航海灯の淡い光を浴びながらウィスキーを飲みはじめた。

喉が酒精にちくちくと反応するたびに、おれはくくっと笑い声を洩らした。つい四時間まえにインド洋の波に身を躍らせた鷲沢剛介がそんな男だとは思いもよらなかったからだった。おれは鈍いスクリュウ音を聴きながら笑いつづけた。暗がりのなかで笑いながらウィスキーを飲みつづけた。

全身の筋肉の隙間に酔いが心地よく浸みこんでくるのを感じながら、背後で居住区のドアが開くのを聴いた。足音がこっちに近づいてくるのがわかった。

「だれだい？」おれは振り向きもせずに言った。

「ぼくです」佐野春夫の声だった。

「どういうことになった？」

「おかげで助かりました」佐野春夫はおれのそばに腰をおろした。「タマタヴで下船させられ

此为试读，需要完整PDF请访问：www.erton